

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24593372

研究課題名(和文) 当事者による分娩時クライシスマネジメントのためのヘルスプロモーション

研究課題名(英文) Health promotion for risk management during crises in delivery by pregnant women who need long transfer to facilities

研究代表者

林 佳子(hayashi, yoshiko)

札幌医科大学・保健医療学部・講師

研究者番号：50455630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、分娩時に長距離の移動を要する妊婦(以下、長距離移動妊婦)が安全に分娩を迎えるための教育プログラムを開発することである。長距離移動妊婦が居住するA町をフィールドとし、当事者である長距離移動妊婦、A町保健師、分娩施設の助産師を対象にインタビューを行い、長距離移動妊婦の教育ニーズ、教育機会を調査し、教育プログラムを検討した。その結果、教育プログラムには分娩進行時の対処法と緊急時の救急車要請法を含める必要性が示唆された。長距離移動妊婦は分娩準備教育を受けたいと考えていたが、保健師または助産師による教育機会が少なく、分娩に関する専門的知識のある人材のさらなる確保が大きな課題であった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop an educational program to increase perinatal safety for pregnant women who must travel long distances to give birth. We interviewed such women who live in town A, as well as public health nurses in town A and midwives working at delivery facilities, to determine the educational needs of these pregnant women and their current educational opportunities, and to investigate possible educational programs. We found that the program should include instructions for pregnant women how to prepare themselves during labor and how to call an ambulance in an emergency, while these pregnant women hoped to receive education before delivery, they have few educational opportunities. The primary challenge is to hire professionals with specialized knowledge about delivery.

研究分野：母性看護学、助産学

キーワード：妊婦 僻地 出産準備教育 安全管理 ヘルスリテラシー

1. 研究開始当初の背景

現在、日本国内では産科医療に関するマンパワーの不足と偏在が大きな問題となっている。産科施設の集約化は単に人員を集約したのではなく、医療の重点化を図って施設における医療の質と人員を担保することを目的とされてきた。しかし、集約化の拠点となった病院に勤務する助産師への調査の結果、人員が増員されたにもかかわらず、受診者の増加により多忙になったため「医療の安全性の低下」、「業務負担の増加」、「妊産婦の不安・負担の増加」、「医師との連携・信頼関係の不足」の問題を感じていることが明らかになっている。一方、集約化により周産期医療のスタッフが不在となった、または減じた施設では、分娩の取り扱いの中止や産科診療の中止を余儀なくされている。その影響により妊産婦は生活圏外にある施設まで出向いて妊婦健診を受け、分娩しなくてはいけなくなった。さらにそれらの妊産婦の中から分娩施設に移動する車中で分娩に至る例や、搬送中に救急車で分娩になった正期産の新生児が低体温になった例も報告されるようになった。

研究グループではこれまで分娩予定施設までの移動に2時間前後を要する妊婦（以下、「長距離移動妊婦」とする）を対象に調査を行ってきた。その結果、【物理的な距離があることでのぬぐえない緊張感】があり、医療施設から離れていることは、健康状態にかかわらず住民の不安につながっていることが明らかになった。

一方、生活圏に医療施設がない妊婦が行ったセルフケアの特徴は「妊娠経過において異常を予防し正常を保つために、自らあらゆる情報源から情報を得て自ら行動した」とことと報告されている。生活圏に医療施設がない長距離移動妊婦は不安を抱えていようと、セ

ルフケアをとれるように学習の機会があれば、自分と自分の子供を守るためのセルフケアを行うことも可能だと考えられる。

予期せぬ施設外分娩の背景には生活圏と分娩施設との長距離化があり、その根本には産科医療体制の課題がある。根本的な解決にはまだ時間を要すると考えられ、予期せぬ施設外での分娩に伴う母児の危険を防ぐ緊急回避的な対策が必要といえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、分娩施設への到着前に分娩に至る危機的な状況に遭遇した場合、産婦とその家族が対処するための知識と方法を身につける妊婦教育プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

研究フィールドは、分娩施設を有さない北海道沿岸部のA町である。A町では産婦人科の出張医による妊婦健診が月数回あるが、常勤の産婦人科医が不在のため、分娩は町外の医療施設を利用する必要がある。一番近い施設までの距離は55kmあり、地域の拠点病院までは約120kmの距離がある。

【研究1】長距離移動妊婦の特性に関する調査

目的：長距離移動妊婦が抱く分娩に関する心配とそれに備えた準備を明らかにする。

方法：分娩施設がないA町の長距離移動妊婦を対象に、半構造化面接により分娩に関する心配とそれに備えた準備についてインタビューし、質的記述的分析を行った。

【研究2】長距離移動妊婦が受けられる母子保健サービス、病院からの情報提供などに関する調査

研究2-1 A町保健師を対象とした調査

目的：分娩施設がないA町の妊婦を対象とした母子保健活動と長距離移動妊婦への分娩

準備教育上の課題を明らかにする。

方法：A 町の公的資料から市町村概要と母子保健事業の情報収集をし、母子保健事業を担当する保健師を対象として、長距離移動妊婦を把握するための情報収集やアセスメント、長距離移動妊婦と対応する上で心がけていること、困難と感じていること、地域で行っている長距離移動妊婦への分娩準備教育に関する課題についてインタビューを行い、データは質的記述的分析を行った。

研究 2-2 A 町の分娩受け入れ施設である C 市立病院の外来助産師を対象とした調査

目的：僻地の周産期医療を担う病院の産婦人科外来において看護師の中で単独勤務をする助産師の役割と活動内容、および抱えている葛藤と課題を明らかにする。

方法：C 市立病院の産婦人科外来に勤務する D 助産師を対象とし、保健指導場面の観察に関するフィールドノートのデータとインタビューで得られたデータについて質的記述的分析を行った。助産師には産婦人科外来における役割、業務内容、妊婦に対応する上で心がけや困難、長距離移動妊婦への分娩準備教育に関する課題についてインタビューをした。

【研究 3】妊婦に必要な健康教育と、長距離移動妊婦に必要な健康教育内容から健康教育プログラムの検討、および実施と評価

目的：分娩施設のない地域における分娩時の長距離移動に備えた準備教育を受ける必要のある妊婦と教育内容を明らかにする。

方法：A 町在住の長距離移動妊婦、A 町の保健師、C 市立病院助産師からのインタビューの分析結果より教育の必要性が高い妊婦と教育内容を分析する。

4. 研究成果

【研究 1】研究フィールドの長距離移動妊婦の

特性に関する調査

対象者：6 名の A 町在住の妊婦で、経産婦が 4 名、初産婦が 2 名であった。

結果：95 のコードから 18 のサブカテゴリーが抽出された。さらに、7 つのカテゴリーが抽出された。カテゴリー名は【入院時期を逃さないために最新の準備をする】【入院時の上の子の預け先について決めておく】【救急車を含めた入院時の移動手段と車内での体位を考える】【分娩経過をイメージし心配する】【妊婦健診や母親学級で医療者に相談する】【同じ地域の友人・知人の出産体験談を聞き、心の準備をする】【家業への支障を心配し調整する】

考察：長距離移動妊婦は同じ地域の友人・知人の分娩体験を聞き、自分が分娩施設へ到着する間の状況をイメージしていた。イメージすることが心配につながる一方で、自ら妊婦健診や母親学級において医療者に相談するという保健行動の動機になっていたとも考えられた。長距離移動妊婦は、移動中に分娩が進行することを恐れ、適切な時期に入院したいと考えていた。そのため出血の有無を常に確認する等、自身の変化を気につけ、冬はこまめに除雪しガソリンを満タンにして「入院時期を逃さないために細心の準備をする」、「救急車を含めた入院時の移動手段と車内での体位を考える」という特徴的な準備をしていた。また、家庭状況に応じて、経産婦では「入院時の上の子の預け先について決めておく」、酪農業を営む家庭では「家業への支障を心配し調整」を行っていた。

研究 2-1 A 町保健師を対象とした調査

対象者：A 町において母子保健事業を担当する保健師 7 名

結果：インタビューの分析から 14 のカテゴリーが抽出された。保健活動に関して【分娩準備教育は病院に任せて病院受診につなげ

るのが保健師】【B市の中で楽しい子育てにつながるよう妊娠期から働きかける重要性】【妊婦向け健康教室の目的は将来の子育ての仲間づくりと女性の健康づくり】【保健師が医学的リスクと主に重視する妊婦の社会的能力と家族関係】【母子保健活動や施設・住民とのネットワークからリスクを抱える妊婦のピックアップ】【保健師が妊娠中に必ず把握している分娩予定施設】【保健師が妊婦に強調している通院・入院時の交通手段の確保の必要性】【保健師が保健指導している分娩時・異常出現時の病院への連絡の必要性】が抽出された。また、長距離移動妊婦への分娩準備教育上の課題として、【医学上の疑問、経済上の悩みと制度利用への疑問を抱える妊婦】【妊娠・出産管理を市内で完結できない環境】【個人的交流、ネットや本から得る妊娠・出産に関する情報】【保健師とつながらない妊婦が抱える課題】【妊娠中には互いに連携を取ることがない病院と市町村】【妊娠・出産・子育てに関する保健活動をする上で保健師が感じる葛藤】が抽出された。

研究2-2 A町の分娩受け入れ施設であるC市立病院の外来助産師を対象とした調査

結果：対象者のD助産師はC市立病院の産婦人科外来に勤務し、妊婦健康診査時の保健指導、妊婦からの電話相談への対応、医療機関・市町村など外部との妊婦に関する連絡調整、妊婦の診療における医師の補助を担当していた。診療補助はD助産師以外の看護師5名も担当していたが、妊婦への保健指導や相談対応、妊婦に関する病棟や外部との連絡調整はD助産師特有の役割であった。C市立病院は年間の分娩が約300件ある地域周産期母子医療センターだが、最寄の分娩施設が170km離れた（車での移動時間約2時間）B市立病院であるため、周産期の一次医療も担い長距離移動を要する妊婦が多く利用する

施設であった。医学的にリスクのあるケースは、B市立病院または250km離れた（車での移動時間約4時間）A病院に、救急車、ヘリコプター、ジェット機のいずれかで搬送することとなっていた。D助産師が役割として行っていたのは、【全妊婦の保健指導と電話相談への対応】【社会的リスクを抱える妊婦のピックアップ】【気になる妊婦との直接的対応と病棟や保健師との連携】【困難事例の妊婦健診に立ち会って行う医師への状況説明】【待機入院が必要な妊婦のピックアップ】【嫌がる妊婦に待機入院を納得してもらうための説得】【待機入院に要する費用の説明の事務担当者への依頼】であった。また、D助産師は【医学的ハイリスクはヘリやジェット機での搬送が必要な地域の周産期医療の厳しさへの認識】を持ち、さらに助産師として取り組むべきことがあると考えながらも、外来に助産師が他にいないことで【母親学級の必要性を知っていても取り組めていない現状】【外来で助産師が自分しかいないことでの悩みと辛さ】という葛藤を抱えていた。考察：わが国の周産期医療体制は僻地における人的資源の不足が課題で、助産師数も不足している。D助産師は葛藤を抱えながら、妊婦に関する大半の業務を役割として担い、助産師偏在の改善と、従事している助産師を支えるネットワーク作りが必要と考えられた。

【研究3】長距離移動妊婦に必要な健康教育内容から検討した健康教育プログラム

結果：A町の保健師は長距離移動妊婦が分娩準備教育を病院で受けるのが望ましいと考えていたが、C市立病院の妊婦指導は1名の助産師が担当し、時に時間を取れない現状にあった。妊婦向けの集団教育はA町では受講率が低く、C市立病院では実施されていなかった。分娩準備教育の必要性が高い妊婦は、前回の分娩経過が早かった経産婦、地域の事

情が分からない転入者、家業・職業のため家族が病院へ送れない妊婦であった。教育内容には、分娩時の移動手手段の確保、移動車中の過ごし方、移動中の病院との連絡内容、医師から推奨された場合の分娩誘発・待機入院の受け入れがあがった。

考察：分娩準備教育を受ける必要性が高い妊婦は、個別保健指導を受けることが望ましい。また、地域特性を考慮した分娩準備に関する教育媒体を用いることが有効である。研究開始時点には、長距離移動妊婦用の分娩準備のための教育プログラムを開発し、その評価まで行う予定であった。しかし、研究フィールドである A 町において、長距離移動妊婦向けの教育プログラムを実施する分娩の専門的な能力を有する人材が確保できないことが明らかとなった。また、分娩施設においても教育する側の人材確保が大きな課題であった。教育プログラム、教育方法などができても、教育体制作りが整わなければ、プログラムが活用できないため、研究の進め方を再考する必要性が生じた。僻地における長距離移動妊婦向けの教育システムのあり方を構築していくことが優先されると考え計画の一部を実施せず終了することとした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

林佳子, 正岡経子, 荻田珠江, 山内まゆみ, 伊藤幸子, 中澤貴代. 分娩施設に長距離移動を要する妊婦への分娩準備教育. 札幌保健科学雑誌. 3. 19 - 26. 2014. 査読あり.

林佳子, 荻田珠江, 正岡経子. 分娩施設への長距離移動を要する妊婦が持つ入院時の安全確保に関する認識. 札幌保健科学雑誌. 2. 35 - 43. 2013. 査読あり.

〔学会発表〕(計 7 件)

林佳子, 正岡経子, 相馬深輝, 植木瞳, 伊藤幸

子, 山内まゆみ. 長距離移動を考慮した分娩準備が必要な妊婦と教育内容. 第 57 回日本母性衛生学会学術集会. 2016 年 10 月 14 日 ~ 15 日. 東京都港区.

林佳子, 正岡経子, 相馬深輝, 植木瞳, 伊藤幸子, 山内まゆみ. 僻地の周産期医療を担う病院における外来助産師の役割と葛藤. 日本ルーラルナース学会第 11 回学術集会. 2016 年 9 月 3 日 ~ 4 日. 山梨県中央市. 相馬深輝, 林佳子, 植木瞳, 正岡経子. 分娩施設がない B 市の保健師が行う妊婦のリスクスクリーニング. 日本母性看護学会. 2016 年 6 月 18 日. 福岡県久留米市.

植木瞳, 林佳子, 相馬深輝, 正岡経子. 長距離移動妊婦の分娩に関する心配と準備. 第 30 回日本助産学会学術集会. 2016 年 03 月 19 日 ~ 20 日. 京都府京都市.

林佳子, 正岡経子, 相馬深輝, 蝦名智子, 小林径子, 伊藤幸子, 山内まゆみ. 分娩施設まで長距離の移動を要する妊婦が分娩準備教育を施設と市町村で受ける機会. 第 56 回日本母性衛生学会総会. 2015 年 10 月 16 日 ~ 17 日. 岩手県盛岡市.

林佳子, 正岡経子, 相馬深輝, 蝦名智子, 小林径子, 伊藤幸子, 山内まゆみ. 分娩施設がない地域の市町村保健師による妊婦保健指導. 日本ルーラルナース学会第 10 回学術集会. 2015 年 8 月 28 日 ~ 29 日. 栃木県下野市.

Yoshiko Hayashi, Keiko Masaoka, Tamae Ogita. A comparison of recognition about Childbirth Safety in Pregnant Women from Two Regions Living far from Any Birthing Insitution. 3rd World Academy of Nursing Science. 2013 年 10 月 18 日. Seoul, Korea.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林佳子 (HAYASHI YOSHIKO)
札幌医科大学・助産学専攻科・講師
研究者番号：50455630

(2)研究分担者

山内まゆみ (YAMAUCHI MAYUMI)
市立札幌大学・看護学部・講師
研究者番号：00322917

正岡経子 (MASAOKA KEIKO)
札幌医科大学・保健医療学部・教授
研究者番号：30326615

伊藤幸子 (ITO YUKIKO)
旭川医科大学・看護学部・准教授
研究者番号：50301990

相馬深輝 (SOUMA MIKI)
札幌医科大学・助産学専攻科・助教
研究者番号：30753503